

## カントリーエレベーターの利用に関する考察

水 上 泰 介

(九州農業試験場)

MIZUKAMI, T.

### 1. カントリーエレベーターの概要

対象としたカントリーエレベーター（以下施設という）は、福岡県大川市に所在する。この施設は九州でははじめて設置されたものである。昭和43年1月に竣工。工費 102,000千円。規模は本サイロ 300ton 4本, 200ton 4本, 計 2,000ton, 他に間隙サイロ 100ton 3本がある。

昭和43年度産米について処理状況を調査したのであるが、同年度保管実績は乾燥粳1100ton で能力に対する稼働率は55%であった。

### 2. 施設利用の実態

大川全市では、利用農家の全農家対割合は18.5%であるが、これを区別（旧町村別）、経営規模別にしらべてみると第1表のようになる。

第1表 区別・経営規模別利用実績

	50 a 未満			50~100 a			100 a 以上			合 計		
	全農家	利用農家	利用率	全農家	利用農家	利用率	全農家	利用農家	利用率	全農家	利用農家	利用率
大 川	188	14	7.4	41	9	22.0	54	16	29.6	272	39	14.3
三 又	206	28	15.7	93	17	22.4	73	30	41.1	372	75	25.3
木 室	385	62	16.1	214	91	42.5	163	78	47.8	762	231	30.3
田 口	263	32	12.1	128	14	10.9	121	21	17.3	518	67	12.9
川 口	324	21	6.5	206	30	14.6	101	22	21.7	631	73	11.6
大野島	277	29	10.5	145	25	17.2	36	19	52.7	458	73	15.9
道海島	59	10	16.9	33	6	18.2	28	6	21.4	118	22	18.6
全市合計	1,702	196	11.5	860	192	22.3	580	192	33.1	3,131	580	18.5

施設の所在地は木室区である。やはり所在地の利用率が高い。規模別にみると大規模になるほど利用率が高くなっているが、これは零細農家、兼業農家ほど利用率が高くなる傾向のあるライスセンターと傾向が異なる。なお所在地の利用率の高いことを、粳運搬の距離が近いことから説明するのは正しくない。それよりも、施設の設置工事段階から現物を目撃し

ていて、いわばなじみになっていることの影響の方が大きい。川口区の農家の多くが、施設を見たこともないと語っているのはその事を物語っている。

次に施設を利用するといっても、農家が自家産粳の何%を施設に委ねているかを知らないと正しい意味の利用率はわからない。その点を全市および利用率が特別に高くも低くもない2つの区について調査したのが第2表である。

第2表 施設依存率  $\text{依存率} = \frac{\text{施設処理量}}{\text{生産総量}} (\%)$

		0~20%	20~40	40~60	60~80	80~	計
全 市	全戸数	63	165	135	97	122	582
	比 率	10.8	28.3	23.1	16.6	20.9	100
三 又 区	50a未満	0	1	6	8	12	27
	50~100	3	7	3	3	1	17
	100~	9	13	5	2	0	29
	計	12	21	14	13	13	73
大野島区	50a未満	1	6	10	7	5	29
	50~100	5	10	5	3	0	25
	100~	9	8	2	1	1	21
	計	15	24	17	11	6	75

この表にみられるとおり、農家は施設を利用しているとしても、全量利用しているのではない。特に上層農家は施設依存率が低い。これは苗代に対し粳がら炭を施用する技術慣行があることによる。つまり、施設に出すとこの粳がらがなくなるのである。

### 3. 集落調査

全体的にみると施設に近い集落、規模の大きい農家が良く利用していることは上述のとおりである。しかしながら集落の中には、上層農家ほど利用率の低い集落もかなりあるし、また施設に近くても利用率の極めて低い集落もある。そこで利用の実態をより深く分析するために、集落5つについて農家のききとり調査を行った。選定集落は次のような特徴の

あるものを選んだ。

- ア. 隣り合った2集落で、利用率がそれぞれ、0%、32.4%と大きく異っている2集落。
- イ. 下層農家の利用率が特に高い集落。
- ウ. 施設から離れているが利用率の高い集落。
- エ. 利用率の極めて低い集落。

以上の集落調査の結論だけをここで紹介する。

#### 施設を利用する要因

- 労働力不足
- 農機具（特にもみすり機）の欠如、または不足
- 兼業機会の増加
- 倉庫の不足

#### 施設を利用しない要因

- 施設不信（粃量の検量えの不安、米の等級低下  
えの不安、施設えの認識不足）
- 粃がらの必要性
- 現金支出
- 興味がない、（現状に満足）

大川市では、現在この両要因が拮抗状態にある。したがって、今後利用率が急上昇もしないが、急下降もしないと思われる。施設が農家から特に喜ばれているわけでもなく、きらわれているわけでもない。

#### 4. 大川市における施設の意味

施設の一般論的位置づけは；「米麦についてその生産、乾燥、調整、検査、貯蔵、および流通について一貫して合理化する必要があるが、この施設は、そのうち乾燥から貯蔵までの分野を受けもつ」（農林省、米麦生産流通合理化モデルプラント設置運営事業実施要領）

ところで大川の施設は生産から流通に到る合理化の「つなぎ役」を果しているとは思われない。積極的に生産過程を変革するに到っていない。例えば、この施設の存在が、コンバインの利用拡大につながっていない。これはそもそもコンバインが活躍するような耕地の状態でないこと——クリークが存在一による。しかしこの点は、将来小型の性能の良いコンバインが導入され出すと、この施設は威力を発揮しよう。今はその段階にない。また流通の合理化にも積極的役割を果してない。もみのバラ輸送が伴っていないので、この施設で調整せねばならない。調整までするので、更に玄米倉庫が必要になっているという矛盾すらかかえている。従って現時点では大川の施設は単なる倉庫であると思っ差支えない。

しかしこのことは施設側の責任ではない。施設を取り巻く環境が悪いのである。まず農業構造の改善、食糧の買上げ、販売制度の改善が必要である。